Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-22

「韓国内の『親日派』は国賊である」と言われたら

木村，幹

(Citation)
韓国・北朝鮮の嘘を見破る ： 近現代史の争点30:71-79

(Issue Date)
2006-08

(Resource Type)
book part

(Version)
Accepted Manuscript

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90001594

「『韓国内の「親日派」は国賊である』と言われたら」

朝鮮王朝の宮殿が立ち並ぶソウルの旧市街。この街を見下ろすように、南山は立っている。朝鮮王朝時代には朝鮮半島の人々の神話的始祖である檀君を祀る国師堂があったこの山は、日本統治期には朝鮮神宮が置かれた場所であり、1950 年に代には、当時の大統領・李承晩の巨大な銅像が立てられたこの山は、常にソウルの聖域であり続けている。そして、今、この山の一角には、1970 年朴正熙政権期に建てられた、安重根記念館が鎮座している。そのことは安重根の業績が、どれほど高く評価されているかを表している。

このことは一見、奇妙にも思える。何故なら、安重根による伊藤博文暗殺が、当時の大韓帝国が日本による植民地へと転落することを妨げるのに、どれほど寄与したかは疑わしいからだ。伊藤自身の暗殺直前の言動から判断して、伊藤が暗殺当時まで韓国併合に反対する「熱意」を有していたかは疑わしいものの、少なくとも彼が併合に対して積極的であったとは言い難いことは動かせない。

勿論、安重根が韓国で評価されるのには、理由がある。第一に伊藤は、1905 年から 1909 年にかけて、日本を代表して韓国政府に臨んだ人物であり、その間に日本の韓国への介入の度は大きく増している。韓国の人々にとっては、そのような伊藤の存在は、韓国への侵略を進める日本を象徴するものであり、その意味で、伊藤が韓国人の恨みを買うことには理由があった。言い換えるなら、伊藤の暗殺は、日本への抵抗を意味する、象徴的な行為であり、だからこそ、韓国人は安重根の「成功」を評価したのである。

また、「暗殺」という手段さえも、それによって直ちに安重根の行為が賞賛に値しないということはできないかも知れない。「暗殺」やテロリズムを企てた人物を「歴史の英雄」から除かなければならないのであれば、わが国もまた、明治における「偉人」の多くを失うことになるだろう。様々な「運動」や数々の「革命」。世界各国の歴史は、何れも、血塗れのエピソードや暴力に満ちている。その事実を忘れて、批判することは、確かに世界史に対する無知の謗りを免れない。

何れにせよ、安重根が韓国において評価されること、それ自身にはそれなりの理由がある。問題があるとすれば、韓国民族史の中で、どうして安重根がこれ程までに高い地位を与えられている、ということにある。安重根による伊藤暗殺は、それ自身が歴史を大きく動かした訳ではないし、また韓国には安重根以外に、日本による植民地化に抵抗した人物がいなかった訳ではない。にも拘らずどうして南山に祭られているのは、安重根なのか、ということである。

その答えは、韓国の同じ時代の多くの民族主義者の業績を見てみればすぐわかる。例えば、日本に併合される以前、19 世紀後半から 20 世紀初頭までの韓国の運動家達の思想的方向性は、大まかに言って二つに分けることができる。即ち、王朝の積極

的な改革を主張する「開化派」と呼ばれる人々と、これを拒む保守的な人々である。厄介であったのは、韓国においてはこの「開化派」の人々が、中国やロシア、更には日本といった列強と関係を持ち、これらの国々に利用される「親中派」、「親露派」そして「親日派」へと転落していったことであった。

問題は、併合後の民族運動を主導した人々の多くにもあった。なるほど三一運動は、世界的に見ても大規模な民族運動であった。しかしながら、それを主導した人々の相当数は、その後、日本統治への協力に手を染めてゆくこととなる。辛うじてそれを逃れたのは、アメリカや中国、更にはソ連に逃れた亡命者達であったが、彼等は今度は日本から開放された後、アメリカとソ連の会い争う状況の中、血みどろの政争を展開することとなる。金玉均、朴泳孝、金性洙、呂運亨、李承晩、そして、金日成。19 世紀後半以降の民族運動に名を残した彼等は、どこかで必ず「歴史の英雄」としては相応しくない過去を有している。

こうして見ると、何故に、安重根が脚光を浴びるかも明らかになる。伊藤博文暗殺事件において脚光を浴び、その僅か一年後に処刑されることとなった安重根は、それ以前においては業績を残してはいない。また当然のことながら、彼の死の五ヵ月後に開始される公式の植民地統治との関係も一切持たなかった。言い換えるなら、安重根の最大の特徴は、伊藤博文暗殺という、韓国民族運動史において大きな象徴的な意味を持つ事件の主人公である以上に、その短い経歴が、日本や列強との関係の中に「汚れていない」、ということにこそある。歴史に一瞬だけ登場し、その前後に目立った業績を持たない人物。それは確かに、ある民族や国家の「物語」を作り出すのには、使いやすい人物であるということができる。

勿論、韓国の近現代史におけるその他の重要人物の経歴が、韓国の民族史の観点から「汚れて」しまったのには、理由がある。韓国がはじめて西洋国家に国を開いたのは、1881 年。日本のそれから実に 28 年も遅れている。南北戦争、イタリア統一戦争普墺戦争、普仏戦争。1880 年代はちょうど欧米各国が一時的な混乱期を経て、再びアジアに本格的に目を向け直した時期に当たっている。日本もまた、その間に幕末維新の混乱期を経て、体制を建て直し、中国もまた同治中興と李鴻章等の洋務運動により、勢力を幾分か回復した。帝国主義時代におけるこの遅れが、韓国が直面する問題をどれだけ大きくしたかは想像に難くない。

加えて、朝鮮王朝の財政規模は、明治政府は勿論、江戸幕府のそれよりも遥かに小さかった。与えられた少ない時間と資源で、巨大な圧力に対峙する。金玉均や朴泳孝等、19 世紀朝鮮王朝の開化派が、何故に当初は意図したかにも見える自力での改革を次第に断念し、日本への支援を求めなければならなかったか。その背景には、開国の時期が遅れ、切迫する列強の脅威に比して、僅かな財政的資源しか持たない朝鮮王朝の根本的な問題が存在した。彼等「親日派」の苦悩の奥深さを理解することなしに、韓国近代史の理解はあり得ない。

同じことは、併合以後の民族運動についても言うことができる。大韓民国臨時政府が列強から承認を得られなかったことに現れているように、日本統治期の韓国の民族運動は大きな国際的孤立へと追い込まれていた。運動そのものも、三一運動以後は、総督府の硬軟両様の政策により抑え込まれ、その中で、多くの民族運動家が「親日派」へと転向することを余儀なくされた。勿論、そのような彼等の弱さを道徳的に非難することはできるかもしれない。しかしながら、同時に、彼等の直面した問題が何であるかを故意に見落とすことは、後世の歴史の高みから不当な評価を下すものとの謗りを免れることはできないであろう。近代朝鮮文学の父である李光洙や、三一運動宣言文の起草者である崔南植が、どうして独立運動から自治運動へと後退し、更には、総力戦期に日本への協力者にまで転落したのか。そのことを考え抜く中でしか、民族主義が何であるかを知ることはできない。

そして、そのようなやり方を続けている限り、自らが振り上げた後世からの批判の刃はやがては自らの上に落ちてくる。例えば、今日の韓国では、どれほど大きな民族運動史上の功績を残した人物でも、一度でも対日協力の過去があれば、「親日派」として激しく非難される。実際、昨年様々な団体が発表した「親日派」リストには、政治、経済、文学等、様々な分野で、韓国のその後に重要な役割を果たしてきた人物が含まれている。日本による朝鮮支配は絶対な悪であり、それに一度でも協力した人間はない、駄目だとされているのである。

問題は、今日の韓国、少なくとも、その政権の立場によるならば、同じような絶対悪とされるものが、もう一つある、ということである。即ち、それは、朴正熙、全斗煥と続いた、軍事政権の支配である。にも拘らず、これらの政権に拘った人々が同じように、厳しい非難を浴びせられているかといえばそうではない。全斗煥や盧泰愚のように政権の最上層部にいたものを除き、多くは、その後も政界、或いはその外の世界で生き残り、依然として重要な位置についている。

勿論それは、軍事政権への加担者の「悪」の程度は、民族の敵に協力した「親日派」のそれに及ぶべくもない、ということもあろう。見落とされてはならないのは、軍事政権との関りについては、多くの人々が「やむを得なかった」と考える傾向がある、ということである。それは軍事政権による弾圧が、日本統治のそれより厳しかった、ということを直接的に意味しない。それよりも重要なのは、今の韓国に生きる多くの人々が、日本統治の以後に生まれ、軍事政権による支配を経験した人々である、ということである。つまり、日本統治については、その終焉後に生まれた彼等は、安重根以上に「無垢」であり、だからこそ、辛らつに臨むことができる。しかし、軍事政権については、彼等の皆が、何かしらの関りを持ちながら生き、そして暮らしてきた。政府に職を得た者については何をや言わんか、であろう。建前としては「悪」であるのに、声高には批判できない。それは誰もがその時代を共に生き、暮らしたから、なのである。

しかしながら、そのようなダブルスタンダードは誠実ではなく、長続きする筈もない。

「後世の高みから批判する者は、その自らの後継者により、自らが行ったとの同じやり方で、必ず批判されることとなる。何故なら、現状と妥協せず理想主義にのみ従って生きよ、ということは、一部の極端な道徳者を別にすれば、大多数の人々にとって不可能なことだからである。

歴史を学ぶことに価値があるとすれば、そのような人間が、如何に現実と格闘し生きたかを学ぶことであり、自らもできもしない基準を掲げて、批判することではない。そう思うのは、きっと我々だけではないはずである。